脳卒中片麻痺患者の運動機能予後予測における拡散テンソルトラクトグラフィーの有用性

木佐俊郎[1)3)]　加藤三千夫[2)]　酒井康生[3)]
美津島穣[4)]　大田誠[1)5)]　馬庭壮吉[3)]

キーワード：拡散テンソルトラクトグラフィー，脳卒中，片麻痺，運動機能，予後予測

要　旨

脳卒中片麻痺（完全麻痺，不全麻痺各14例，脳出血19例，脳梗塞９例）運動機能の予後推定における拡散テンソルトラクトグラフィー（DTT）の有用性について28例で後方視的に検証を試みた。

平均62±30病日に撮像したDTT上に，病巣側に皮質脊髄路（CST），同側または対側に皮質網様体路　（CRP）のいずれかが認められた19例では，これら病巣側CST，同側または対側CRPいずれも認めない症例群９例に比べ，有意に（P＜0.01）片麻痺の改善（修正Brunnstrom stageで上肢・手指・下肢のいずれかで１ランク以上の向上）がその後あった。病巣側のCSTの有無も麻痺の改善と有意（P＜0.01）の関係が認められた。一方，病巣側にCSTが認められなくても麻痺改善があった６例の内３例では病巣側・対側にCRPが出現していた。片麻痺改善と経脳梁繊維（TCF）出現との関係については不明であった。肢体の近位・遠位で回復機序が異なるとされる片麻痺の予後予測に基づくリハビリテーション診療に，DTTは有用と考えられた。

は　じ　め　に

脳卒中のリハビリテーション（以下リハと略す）においては，運動麻痺に対して適切な予後予測に基づいた効果的なリハが行われなくてはならない。脳卒中に後遺する運動機能の回復に，急性期～回復期初期は脳内血種の縮小や脳浮腫の消退が関与するが，回復期ではリハ療法や装具療法の役割が重くなる。

近年，拡散テンソルトラクトグラフィー（diffusion tensor tractography; DTT）の臨床応用がなされるようになり，我々も少数ながら視床出

Toshiro KISA et al.
1）松江生協病院　リハビリテーション科
2）同　放射線技術科
3）島根大学リハビリテーション医学講座
4）松江生協病院　脳神経外科
5）同　脳神経内科
連絡先：〒690-0017松江市西津田8丁目8-8
松江生協病院リハビリテーション科